中村俊定文庫
文庫 18
183

八田家文庫

陵宝藏

宝玉叢書

人丸号神千寺忌千日表ヶ序

之業ヨリ始テ言ヒ伝ヘテ今ニ至リ其ノ名ヲ明ラカニ
言角山ニ在ル本此寺ヨリ西ノ方ノ月の
ひかり鏡の如くに此あり深き
谷ニ住ル人ハ夜ヨリ夜ニ籠ル
者ニ在ル也ハ昔ハ造ル寺ニ
明ラカニ成リ作サレタル奉納石韻ノ
十巻ヲ勅ノ人ヲ始メ

事なとつのるまゝ奇句所合はしかゝり
秀てもしるしをあらす備れる世はは
佳雲子てかさりて個名はは筆を
入寄はるまゝ句はあつ所を抜まゝ
ゝく佳乎の心とけて桃家ゝ
文臺に序すれとも

癸卯季春十八日　清士下

京都帝国大学

花節卷上

月やもしらん花を見そすれ夢ゝ多
春はゝうはゝの浪ゝ日ゝ鼠　巴雀
凡中ゝ所はは障子に糸竹て　推之
刀ゝ花ハつくゝゝて乱れ　試中
山川ゝ遠ゝ春ゝ餅と酒ゝ　阿文
あゝ秋風ゝ切ゝ吹　一秀
蓑山ゝ雲合ゝ雨ゝ　傘行
白鷺ゝ月ゝ　其考

京都帝国大学

ゝ条坊

第二　一秀

おきゐる白菊の花の新しき
すゑ〻ゝ色や鈴虫の音　八象坊
はまぢの秋節分の門ゝ水おとて　其秀
さゝやかに白へ梅の きらく　推之
有明の月いと淋しき　露柏
梅たゝく中に一人の　常久
風雲の中有ハ雲の　巴雀
かせにとゞまる蛍　試中

第三　竹詞

正一位額ゝてゝ高き中
ゝに跪く若竹乃ゝ　八象
直ぐに扇ゝまえて揚雲雀　阿文
抜るぬりさぬ仕立てあれ　明堂
濡とゝ乃屋根乃滴へ　其秀
雪ゝ角ゝく美人間　山朴
師走やとゝ月ゝ歌　試中
不系通れ雪皆　一秀

第四

世の移ぬる所さくや八重梅　其考

もく倍の紅乃ちる庭　不染坊

うき世の外の秘事ぬ瞿ふ丸て　試中

君名て雪ちらす家もか　一秀

寒さ乃月秋をありて竹の奥　巴雀

焼り晒す新ぬ夕ぬ　推之

初毎に切瑳琢磨の新仁ぬ　竹詞

ゆく秋ぬ戻すと　露拙

第五　山朴

分塚り雪ぬ声使へ水祭

あまぬ乃ぬ乃ぬへて浮時　不染坊

かくり師物咎ぬよ浮ん　竹詞

九して天ぬ三人ぬ超ぬ　阿文

玉申ぬ九く盃ぬ新ぬ　試中

板橋と江戸秋ぬ淋さ　其考

菓月の雪衣ふ宇の蓋初て　一秀

ぬ雪ぬ丸あげてやぬ　傘行

第六　阿文

千早振万葉集をあけ暮れば
いにしへの俤を同じ歌屋　五条坊
出代の時をあけ暮れやきて　傘行
あり経つる柳へ春の立ぬ　山朴
餞別の切目に入る　白雨　推之
秋は暮さのさくらもり
袴をあけ暮れを生れを
世を潜上は宗は切茶　露柏
　　明堂

第七　傘行

松の花咲一きを春と成ぬ
きりいと拙の浪の波山　五条坊
咲る事ものの事と拙の
一張の世と車ぐるくく　山朴
歩ずに石ゝ生れ大扉　巴雀
色純木の用身を入る　常久
蟬蛸のものく酒の仕伏とし　一秀
扇拙を逆くりし　推之
　　阿文

第八　試中

主人[illegible]や[illegible]歌の種物[illegible]

蛙声[illegible]口乃[illegible]の地ハ　文象坊

旅衣[illegible]の[illegible]枕[illegible]　露拙

[illegible]二人下戸[illegible]　傘行

聊[illegible]は[illegible]の[illegible]乃[illegible]　明堂

[illegible]と[illegible]　阿文

[illegible]角も[illegible]三ヶ月　其考

秋[illegible]　烟[illegible]　夏仙　常久

第九　巴雀

月[illegible]中[illegible]あ[illegible]　文象坊

[illegible]千年[illegible]　明堂

[illegible]巣あ[illegible]　試中

[illegible]　一秀

集[illegible]中[illegible]の[illegible]　其考

鶴白[illegible]八[illegible]　傘行

[illegible]　竹詞

第十

千葉ぬきもやの朝霧中ゆすこ　推之

けふ原廣瀬の雲の雲霧　露坊

夜ちらき旅ハ扇ぬ撫て　一秀

夜ゝ明ゝ新涼ぬ橋桁　其考

撫ぬくゝりぬ古敷雪ぬり　竹詞

お大名ぬ行の庭新　誠中

結夏ぬ夏ぬ新ぬ松ぬ月　阿文

田ハ川ゝ岳ゝ稲ぬ　巴蕉

法楽　露川

遍照ぬ神ゝぬ月ぬ光ぬ守神

榊ゝ新ぬ玉ぬ乃ぬ鈴ぬ吉　常久

やゝ下ぬ榊ゝけゝき新ぬ敷ぬ　明壹

多ぬ香ぬ乃ぬ世ぬ月ぬ花ぬ　琴松

きゝやぬ作ぬくちぬ世ぬ花ぬ世　是甫

あれゝゝとゝ年ぬ緑ぬ月ゝ　露拙

今をを此浦新や勝こ峯は壱　伽竹
林ちりさくを我おむ法前に　寅三
呼子や嘴や勅使此石を　京離
嘴を呼ぬ石を神雲　莫咀
柏ゑ太谷林原新雄ゑ哉　立夕
かけろよや多世此笠ゑ立くし　竹節
糸ゆ此世をろ書てや仏法滝　竹末
勢す乙世太神やかろよ多　野水

万灯此新立ちさくに　百市
三十一を此世新や原乃義　立布
岌乃壱神此かさや奉幣使　暁指
神風を出嘴り壱此時　杉角
永寺日太糸やとこよ此山ろ　十竹
ろ此誉れあくをこ壱原氏　伊勢百比
壱伊ゑ年太乃此海干浮　多賀菱洞石
杉ゑ壱を此喉乃おん時　同麒女

咲やまよ人丸さくら雄し　同　緑枝
元義義はるるや今を神るは神　同　和桐
君は山をとやや嫁菜に月　同　朝菜
見ぬ人恋京やや杉次書る菜　同　甚流
野るは精るは月菜るる　多多寺木　玉柯
絶ぬ根の留久しるさくら　全　黄弥
月義はとすは伯へるや神拍　全　巴
鄰帛を山寄はるのるる　全　勿謂

歳行はるよ梅あり月と菜　全　杉花
その程月歳ざん正まはるるる　全　桃酔
語語人をかなるる菜菜　全　海津
幸くは数はるるる梅一の郎　横次候　桃文
春るるは十八日はるるる　全　石水
多よ香よよ春はは梅神の前　全　亀鏡
ちは春の春はは配りもの天り下　全　細石
はるは春とのるるす咲梅へ　全　枳楊

杜若あやめさくらぶ角あしあてき　全　雷雀
梅ゝつこ菊乃雪霜　万人泉　全　白淦
あれまれ　梅やゝ　菊　千年の流　接や　杉と石ゝ　全　信列仁神修琴
立峯
高砂ゝ　桃　全　桃仙
その住の雪ゝと万年　梅　全　湖壺
咲　武蔵　鶴八幡宮　鏡ゝ　全　菊中
その住の海ゝ山　さくら　貝　全　可道

あるゝ　万年　一言　霞ゝ　全　梅宇
雪を十八ゝ　菊　梅ゝ　菊　全　北明
造宮ゝ　錦を　柳さくら　武　全　丁旨
あけ海ゝ　角山　雪　霞ゝ　全　清々
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　全　奇石
神ゝ　沖ゝ　霞ゝ　信列池田　露底
神　鏡ゝ　月　ゝ　全　度解
今ゝ　柳　雪　全　若林

咲花に新き麹や酒すめ　仝　梅答
立梅(ウメ)て少やあれば石千雪　仝　移香
神徒やかけうつまれる春と月　仝　柳色
童迄ハ花乃中なる社哉　仝　敬止
湯難のうとを濁る梅うし　仝　千之
情出て時々ハ来る幽霊　信州飯田　高堂
就灯を春ハ近く梅うめ　月　松本　蛾道
ぬうたるや前ハ上ハ花雪　月　木仁

此時に灯やとあらんと迄梅　月　太河
さかぬ姫や濁て難ハあるまき　月　立笑
難ハ花ハ語るを御ハ自ハ　江戸　巴雅
うらんけ去多ハ我ハ花ハ花ハ　美濃岩村　山桂
明里ハ多のてうたや　信濁　月　雷有
三方ゑ我去ハ大ハ花ハ種　月　桃千
ゑ去ゑを多ゑて清　此御　月　茄桂
神と人清明　雷光中　月　牡若

神と人とをよもしく柳二郎　接次第　鶯梅

その時に祝ふとゆゝ事は老　幸名　正筑

骨髄子徹底の雪　日　孟志

涉神無比第一義　日　坂逢

短冊に七夕ぬるゝあり神代　日　山竹

乃ち小倉伏淵拾ひ出し衣　昧木

発句卷中

追悼

なきまあやうしなきあとの母世我ものこしぬと
立象村の母世我ものこしぬと
やうくよりの世をあきらめ
あゝと呼ぶ世我をあるるを　十竹

露ふるゝ初きを袖哀れ

鈴虫の声や閑を立ぬ　信州飯田　其得

寄せ少れあはれ庵の声　日　良佐

業仕ぬ七夕をあるて三ヶ月　日　知川

道に業に月ふる里と成るゝ　岩村　岫桂

夕鶴の下地をあるは一葉哉　日　三調
盃はゆ海へうかれ出　庵主　日　桃子
草庵の夏やの山の涼　日　南有
悔まじ咲れ笑ひ死の桃　寺木　西柯
見惜うち出の簾かな　一葉哉　全　莫邪
此時の十方ゝ咲れ蓮の露　全　挑酔
出れ高ゝ浪やうちて　蓮の露　全　杜苑
声ばかりゆゑと成ぬ秋の蝉　全　勿謂

深山ばかりの道の草　全　海漣
鄙机のうへや甲斐なき月の光　全　茅巴
立れ間も世ゝやいとゝ月の光　接波賀　白水
その笠とあまつ笠かな　日　桃文
此山の敷やくさ〳〵の柳　日　白淦

吾先ん立るの下ゝ之逆ふ
ふまをぬくゝ切ふまうえ
ちゝ〳〵香花の佛おうあて
いさ我を白人堅路の事の哉　露拙

遠州高野あくあ[illegible]あ[illegible]あ[illegible]あ[illegible]あ[illegible]　義　洞石
洞まげ義てれ[illegible]秋[illegible]ら[illegible]　〃　麒友
少[illegible]て[illegible]る入し　詩一の郷　〃　和洞
[illegible]使あ[illegible]を[illegible]て[illegible]ぬ　〃　緑野
俄[illegible]を蓬萊[illegible]　業　振　栩　木川
八月[illegible]伊や　秋國乃方　全　漱花
義[illegible]仏く[illegible]方[illegible]入[illegible]洞[illegible]　全　小泉
[illegible]れて[illegible]　全　豆笑

中くや[illegible]切ともり[illegible]　今　屋他
一使宜　[illegible]く[illegible]　全　花夕
灯[illegible]て[illegible]　全　漣兎
海[illegible]と[illegible]　全　書眉
[illegible]　全　方色
[illegible]　全　太河
舎利塔[illegible]　全　蛾遊
[illegible]　全　山竹

義を世用を　を仙玉　正統
敷を格を　三條川　仁科　倭琴
使を　他を　あけ世　京を　梅宇
　　京もを月れ初つる
　　又しかられを
近かを　を翠人　他を　を霧泊　湖堂
を義を　相を　法世を　武　立峯
道代を　を　を　十方　御土氏　一秀

孝為る武五条坊とそう蓋ゆく
もくまを廟参詣かきを
かの王裏う富れを　むを
今しやつをく　四雁

出を書代母出とを　義よ笠
萩をのいを　出を多啓　文象
盃を食出　三ヶ月を　何文
　　紙を解を中也　其考
　　紙中
　　傘行

年高誠又つゝかるゝを下ゝ乱れ　杜角
姫ゝりて口の年ゝ少し如　秋家
秋風は角事ゝ吹を世す　坊
ひゝゝきて仕舞　秋白　雁
島那てを知いゝれハ暇ゝを　考
方に色　如此吹く嵐尾崎　中
一ゝ吹ゝゝハせて月を晴ゝゝゝ　行
秋は錦　尾角力は乱　文

以上ゝ雁いくゝ風ゝ安　雁
角ゝゝゝ嵐ゝ嵐ゝ　角
法華て如色ゝ秋ゝ月を　中
世間ゝ稼　大方ゝ乱　坊
十月ゝ似ゝゝ三月ゝ定の海　文
姉は浩紙かりく遠留　考
遠里ゝて如誠のゝく竹　格子　角
今ゝて吹ゝゝゝ乱ゝ定紙　行

六月廿五日 柳子の紀行に川に言
全部力て吸ふ壺坂 産
年貴に よいりを中入す 考
疾貴に 神ふ蒲団かゝ苔 中
ふ雪峠 つゝ 伸に 水車 行
十七日 月の大きさ 文
涼 行 坂 忍 ぬ 秋なる 中
西に 側へ て 恠 我 し 坊

行 庵り ふ ふい 接 坊 産
ふ一 り 近江 八景 角
方 丈 丈 を 接 ふ 坊 を 達 文
き に 鉢 ふ ふ や を し ふ 拔 考
蕨 蕨 ふ 鼻 か む 時 を 觀 て 角
ち き に 蕨 む 口 に 入 ふ 雪 行

古歌或は
ちるもの

おもひきり月ふるぬ秋と成る夕暮　天慶七

七夕とあふ初もなほ初七日　仝

除夜百人一首念仏くり年といまく
二十ヨいたるまおいぜとや

かきつはす袖とそ思ふ白　桃川

さゝ川ゝぬ物を留樂に散ゝり　凡子

其一葉ちるや吹といふかゝ　真考

相思葉ものの裏見まいてゝ成　竹詞

ちるいて初秋ぬ袖ぬくもり　常久

秋きりや毎夕かゝるぬ汗泪　後錄

ゝく露を為ふるゝ歌の如し　曉梧

併やかけぬ一葉ぬ紅代笠　琴系

芭蕉の露乃露の書に葉ゝ　相苑

ゝ蟬ぬ蛾に相り蛾ぬ蛾　主税

ぬゝしぬ秋ぬ切籠ぬ大ゝ出　百市

ゆゝや色蓮ゝ風ゝ乃かゝ　竹所

[illegible]

伯瑜の母筆のそれなり
衰して癒されとまちひき
さらばあるべきはあらず
母堂の御かくれきりやみいる
あんとやみたれば秋の

二月二日書夕暮り　傘行

西鶴や哀析ると御れ　秋袷　鳴水

御堂一字合点を最極　伽竹

切句やゆゆ風八園ゆきて紀鉢　寅三

[illegible]

[illegible]

[illegible]

秋ちは書一葉やひかる　水明

古き衾古き松よりも
ふる衣服ゆゑそなる新
ゆゑたれ

汐抵ひ秋ふのあれ哀さ哉　阿文

墓まうれ留主ゆゑ

うき秋とまれ書唐れ机小　明堂

秋ぞ行やさめぬ夢の旅寝　京籬

志賀毎に行く世世の業ぞ
塩竈の人なりぬれば

砧うち力や尽くす世ごとに　試中

いつれぬ日の郭公
遥かに倒の古りぬるを
れぬるかよ八山の月
けぶりの焼ぬれ

きぬぬぎ白雨庵先生の露　杜角

夕雲あるや本堂にありて袖の秋　巴静

花鬘巻下

旅行

節季作法ぞ新の方かつく
を忽の旅行や百三角の形色坊さん
ひとり生れ毛角を整ひ心ひ
玉城乃初日おまむと行相老人ホ
ぞけまさしてる明れそもすき命
なるる廿日あ角り忠郎の
旅を事とは成ぬ　不象坊

欠落と人を見新し年の旅
笑ひしと跡とし故郷と忘　竹詞

筆硯に算盤をかへし持つ
身の業なれは文章の道ハあせたるも
一とせ見よしの花に姫きよかりし
今ねこしへ誹諧の雲井も風流なり
うらやむ御よまつ世をして作詞の人と
はなのよし其の営たつ書きたけを
我をもし明らか八宿字え完の文合
日剋てはつ出れより例の新席て
日に合せしてゆくまてれわきりても
先見あつす犬もまた世て餞わ行
とし下

梅ちりて春の名残や志賀の内
　　　　　　　　　　　　巴蕉

三月廿二日

　　　　　　　　　　　　庵にて誌

馬場渡

兵擲ぬめりしとえあん氷一の郡　坊

津嶋

年忘六月祓くあらのもり　竹詞

田作の旅の浜の肴器き　坊

孟恵とはねりまれつきと
獎なしの此日尾張に出とて
坂途子の嘉しき振子一つ花
之子若く餞補に侍り

来てみたや見いまり也大焼哉　坊

合羽乃袖をに宿梅のにほひ出ん　坂逢

出船

船うちの雲一まちの雲の中　坊

しの雲の雲の旅を入て　坂逢

笑ひ合声の鶴の鳴て　竹詞

山竹亭一泊りて
月れたせの都の
人くの人のうの

四月廿五日　仕舞一暦の郷　楽名　山竹

月の雲を大ゆくや高の月　正筑

雲をつゝみ門の白の月　坂逢

宿

寅の月の世の泊りて実の地の日　坊

名古屋一出発して
きれたせて都の雑俳座を
まにせもと心の泊の鶴と
枕寒坂とゆきて

雲の月の泊さの月の旅　楽名　孟志

鈴鹿山

剣の八の雲の山の雲　坊

明神の大の雲の雲の雲　竹詞

ゆかしさやかゝる　鈴鹿の戸　孟志

草津

姥ヒとやお焼ちらすけむりゆゑ　坊

餅屋の喰やきさらす　孟志

松本翁廟前

おろかなるなすくにはくちるこゝの上　坊

石塔ゝ雪一つゝ同き菊　竹詞

十徳を召て人くを野す

京の人くを野す

錦きるもたんよ我を是の袖　坊

洛中吟

世ゝの市の中ゝ角ゝ　押小路　竹詞

宮所ゝ森の香もあるゝ内　坊

廿八日入洛して吉士と年

今宮ゝ　探幽寺ゝ　むめの香　孟志

二ヶ所の旅姿

ゝ男ゝ

美しきやくを甲　乃中哉　坊

廿九日二新参会ふく

辛崎の松ゝ七間半哉　全

除夜は大内とおなじきなりて
年忘れの酒とて新年は門　盃志
あしきをと見打ちは豆拾い　坊
新うけは神事八京は風俗の
似と似すりしの三りをもて
的面の悪いなる双傷はさえ
及さえいきすう郭のてふりて
神業は故式なれなる
数万の人みとこもされくゆると
ちくう医腐ょ酒砂かもて
当りとなる　祇打ものを

祭が郭四条串をけりかけ　坊
いい稽こ物とうこ酒は　竹朝
もをきは条河原は白い砂　盃志
尾別り当通は渇書ょ
大とは関や　祇園は削うけ　傘行
元日社参
宮をはあれ祇園大神　式　坊
きうの初日や石を大多石　盃志
小節奉納

梅ちるや郭公なき初る　孟志

玉ぬき掛る　梅小枝　坊

七月十三日竹子城京に洞て
妙子ちゝ母にはなれ留別ス
酒ちり無て

首途萬葉

夕月よ月出度まして立まいの　仝

大史殿五月五日菖蒲を祝して

乃中九日を祝して

餞別大黒舞

三ふ酒おさめて伊勢寒哉　竹詞

春之部

散ちりす彼や雲の山　阿文

深や雪かゝる海ち波　談中

惟我を孫させて雲や鶯の巣　巴雀

病時をかくして梅咲より　蕉迪

梅ぬて鏡形行る也信天寺　洞石

飛鳥川てもみれハ未来素直哉　江戸　安之

鶯の初音に骨ハ折らぬなり　其考

鶯やおもてを通る関寺　雅之

鶯の声や一節なかし川　一秀

七川も通さぬ山の霞哉　明堂

他人親ならぬ佛の別れ哉　五鼎

きさらぎや垣乃椿折れ土の解　良佐

裏門を人の出入や初さくら　西完

よしやそれ雨に拝む福の恵　傘川

此旅立人へ

動よる旅せ川胸よ鳴子哉　阿文

鶯の明けておされくる欲代　本川

一日の世話をわすれおさへたる哉　方色

神の名乃白ふてゝ梅の花　毛柄

椿しも立連樋は垣池　毛秀

鶯の初音まさずこもるなり　修才

蔡茶毒一日蛇釣とり　萩　白之
書屋に一ちら咲て春寒哉　宋鶴
如代や子安地蔵ばかり　阿文
書餅や茶もさたもさらし　其考
人地蔵も形ばかりなる柳哉　淋屯
春乃百物と知り毒と解　桃子
山吹や一町下モに有りて　萩　可吟
魚屋ます鈴道掲出寒哉　冬　其流

さくらが岸より横きる水の影　胡蝶
つたらら此舞岩ゆて春氣哉　太峯
伏見にて
京城如て又都あり桃花毒　金竹
春雨しまと宮の尾の梅見　蕉
白菊や京の水ゆたたねと　其考
柳開く蕉花扇や下駄の跡　緑杖
人見ぬ山も橋一の郭　太河

夏之部

凌霄の散るや吸ふとれば池の水　一秀

朝起きたるや東京　吾仲

藻の花の咲て納まる軍の部　明堂

京居朝起

夏川や足ぬらす仏と閑伽の水　雲風

滝佛を笑ひて笑ひ仏かな　巴雀

川風に袖吹ひるを涼しの郭公　露拙

一声の山の宿　かくしく迷ふ宿　宿下る

侵塞と人ふいたれて安居哉　傘竹

蛍籠ふ足ふ足て蛍ハ蚊ふ寄り　竹部

白雨や鼠地元まして蛍岩山　蓑兎

夕立の跡ふ寄り樫の花　南湖

第や東北間より蜂屋孫太郎　椿之
敬寺大や石れく清土北又立郎　巴雀
与沢郎の東里て豊北水鶴哉　詩中

慈天林山笠覆寺

笠忠踏ち木ら伝ありて栽ル　松角
ち鑿地伊源ー寺ー弁　桃千
川ろ〇や酒北さ多ょ美北老　梅宇
糊ル北油工ち運の海　傘行

百ろ水日ち水くこ高蔵　桃仙
素日や寺ょ寺ろ乃不老つ　玉柯

三引滝山寺て

水ち月地源ょ茅ち何文ち　星行

濃引養老ろく

山水ル百や寺ろ似寺ん味　仝
清佛北祝北さ負地哉　共考
郎文老ル養ろて通ろ人もあり　濤人

紫屋しら戸城 紅て染ゝ那 喪考
學生部此子に行ひ申り 徒竜
たれたてゝ世山此橋の月ゝ
紫式部の浮舟巻をもとに葉
なりつゝ今は葉此罪をけ
ちなれたりかゝて

くきより通ひ 翹此 翰亦哉 美地
市言ふ 食をえめりやかんこ多 ゑ傍
袖ひしつゝまりまりまりまりれ 豆矢
口あいく毒兄たりまれ恐恐哉 穀 卓子

菅笠を白一田植此男ども 梅宇
上人此柳陰に出て
一陽水いさやの乃庇ゝ香需 散 宙之
かさゝ此貴笠ゝ姫田植哉 撒花
紫ゝれ城かゝて兄弟此の書 乾夕
四月雨やすゝしりの深脊ゝ 高光
夕ゝや 陽ちきゝ紙けり 可道
竹地るやたちまて桂ゝ橋むれ 奇石

日ごとに移りかはる花の木　左衛
年ゆく月日とともにかぞへ来る　麒友

思ふ

ながめこそ長くて世はかなけれ　建明
なほ名残ある夕べ哉　中務氏の年也

萩の花黄に咲ぬるかな　和川

学び案ずる

菫一つの面影ゆかしい雫　北明

蟬呼や再び山を神乃森　可道
只今雨降事疑之処
忽来時

俳諧の妙なり数限りなく　麒友
前に来る風を動かす高風　白全
咲風や月ゆかしき郷の道　緑枝
水の声鶯の高ゆく雲の多　何久
静かなる人まで来れば清水哉　菊中
初蝉や上を流れる日和哉　修琴

秋之部

傘行

待宵に面影なれて中の夜　伽竹

三日月や灯ともされし盛れる　菊中

名月や庫裡ゑ通ひ迄　試中

西行はかたみ新なる月　露拙

名月に蕎やゆるて星の原　帳乃

名月や碓ゑ出つむ雨まて

十六夜や中の夜ともれる松　黄旭

十六夜や合掌に影ゆし　坂逢

待宵や大津ゑ出て人原も物ゆ乃記　阿文

熟田うく

帳ゑ月ゑ月ゑ月ゑ月ゑ月　漆入

十六夜やまこと有かて宿利　洞石

十六夜い稲月ゑ光見弐　麟友

名月や水ゑ月ゑ月ゑ月　味鏡原可弥

黄旭

[illegible]

名月や岩戸もむしり打とらん　宗化

名月や猿にきぬたの相哉　[illegible]

十三夜やほのぐらく俤なれり　巴雄

[illegible]

菓子殘る月の湖りやを食せむ　之[illegible]

行秋を[illegible]すの[illegible]の[illegible]　乙由

初汐や雨に浪うつ[illegible]　巴雄

秋暮ぬるを[illegible]　其考

打もの[illegible]や[illegible]　飯田玉川

人[illegible]　志[illegible]

[illegible]　修琴

[illegible]　芦雄

朝[illegible]　飯田[illegible]

[illegible]　一[illegible]

蕭洲屋乃を是年　蒙亮
呈合や留屋　ふ孝行　紙　阿文
郭さきりの関ヲ
ちり行るゆ有もし
ワつ打ちん多ちに　西瓜哉　傘行
あり紅さまゆ　孫の多の　ゆ　莫地
人を寝く　地って　孫さの　灯　哉哉　修琴
女帝　恵より　多品也　富の　れ　英秀
振袖　地　凡　袋　り　や　木綿　取　志摩

幟　吟や　指地　炉　地　さ　ち　沢　太河
ち　ち　氏　安　ん　物　を　天　川　其好
都　鈴　地　ち　ち　屋　地　代　丁　南　教　壺中
ち、一　ち　り　梅　打　里　今　ち　地　霊　和桐
眉　役　ヨ　ち　て　勝　ち　ち　ち　ち　角　力　漣亮
焼　食　地　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　涛々
一　葉　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　丁旨
神　紫　男　地　籠　地　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　伽竹

荒野山八朔之吟

大石より深く秋山の秋　洞石

八朔や乃々いくあまく青蘆　玉柯

い朔は穂あまめて浴衣哉　麟友

名に立ぬ鈴也中の荒中山　露拙

三味線の音多へあり廉の声　洞石

塩ふきの色水ふ紫あるの山　麟友

青柳の多に廉の声　玉柯

良佐妙士ゆ

百士の陵ふ山て青柳哉　南枝

同時銭別

青柳の霧ふ多へ多の上　良佐

情嶮乃水ふ尾尾や所の角　推之

一葉作へ粉ふの桃の葉哉　桃仙

砧ふ少ふ初丁や夜ふ錦入を玉ゆ　錦村

長芳

秋寺に柳に氣力拔ける　明堂

新蕎麦に寸八拍子　俄宗　其行

毎年の秋なれど

玉まつり　張合ひなく　知るべ　黄旭

い鞠球つき　出て居り　梅に雪　江旦

切髪や人を案ずる　和川

居風呂へ納豆を取　共芳

燈ともる度ごとに　秋去　行燈い　誠中

冬之部

雅之

内儀は牡丹　好きなく　紙衣哉　大垣　木周

寄居ゝ雪に居り　神之ゝ

毛氈に書の外ゝ　粘り　東籠

戸棚に寒ゝ　風ゝ　阿文

風ゝ　茶を　柳れ　修琴

[illegible]や神垂月の紅もみぢ　阿文

山中旅森

[illegible]分より月の水の玉　坂逢

細里ゆく船もしぐれや楫の音あり　露拍

糸にまれ声やわたれきりぎす　傘行

山吹乃陰を只の風も小ぐ郎　湖壹

卯月やけりを白いすすきかな　江戸　乙風

天竹のとろろ湯く冬の梅　雪楓

盗人を用心念仏の中夜哉　昨木

十盞ゝ下戸もしらい時雨ぎり　鶯梅

傘やかりつるまゝの神垂月　戸雀

雷の日を川ちかなれてゝ見まゝ　[illegible]田　野紅

弱ゝ[illegible]ぬまこく時雨通り　杉花

あゞ世てとゝやゆ月の杉糸　蓋鈴

[illegible]めゝ[illegible]の[illegible]水哉　桃文

うきねの枕かすや川の雪　楓楊

かれ／＼すゝき塩竈の側の尻瓶哉　汀鄭

一しくれさしめく鴫の夕日哉　白逢

寒声やうらしりをゆき嵐　白水

冬籠前妹まんゑしきり　勿謂

るさゝ里又ちしめきり雨雲枝　桃酔

雪の夜や狸の嫁入さゝめき嫁　孟也

炭竈にちらし息やすみ紫雲代　玉考

一もとの梅まで碁盤おとし哉　傘竹

今様と冬木となり猿まわり　皓木

せの火焼おとつき寄し蓑の襟　巴推

寒梅や盗ませてけり白ひ　之人　巴文

切れ枝もかゝりとて枯野哉　其考

初雪哉見て又見て寐床哉　宗坊

梅ともえまでて冬の柳かな　美旭

鶯の子哉抓にも探揚の巾　丁旨

屏風立て絞せてりしふ以巾哉　其柏

きく数代きくて時の友御　傘の
乾魅や玉眼ぬけて完ふる　阿文
夏鬱鬱物ものしい如来や念仏　仝
雲代はを以つまと　暖と　黄地
月夜より表を開代ふるれ　青眉
そのまに初雪えをや菓霞へ　呉雀
雲月やつくしきに代奥歯を　勿謂
風より蓮華山をぬりきく家　志啓

七七

たちまちやまちくさ籠代ちさつ紀　大峯
御尚城ひすす軟仁を　鐵衣式　鐵中福光　物士
かゆり老寒代ある事も忘れきり　其寿
寒寒をきけりきはあり冬代梅　一秀
時雨より上ようしたち　横河の式　咲木
なりまりを年や年積城蹈まつき　玉柯

宗信

月を御代茶を不かり納代寺　試中

七八冬

蛙声や融き月も入まくと　蓼坊

梭音をしく萩はきり枇杷の花　巴雀

あいやけと寒あさくらの火燵哉　其考

書林　尾州名古屋本町二丁目
木村八右衛門
慶明春五風